

ロス、まだ我れ等の最期は、我れ等の手で仕遂る事が出来るのぢや」  
其時女王の使者として宦官のマーザアンが入つて来た。

アント「おゝ、其方のはあはしい女王の使ひぢやな……。女王は如計によつて我を陥れたのぢやぞ」

マーザ「いや、陛下、女王様には貴下様をお思ひなさる餘り、貴下様と御運を共になされました」

アント「退れ！慮外者か！女王は俺を裏切つたのぢや、反逆者は、同列に死罪ぢやぞ！」

マーザ「一人の人間は、唯だ一度よりは死にませぬ、女王様には御生害遊ばされませんでした、臨終の際にもアントニイ様、愛しいアントニイ様と仰せられました。最後の、お胸も裂ける計りの御苦しみに、終には、アントニイ様と仰せらるゝ聲も聞えずになりました、貴下様の御名前は、半ば女王様の御唇を出

ましたなれど、残る半は、苦しいお胸に残しての御最期——、貴下様のお名前を胸の中に埋めたまゝ、お崩御れなされたので御座りまする」

アント「では死去つたのぢやな」

マーザ「御崩御れなされました」  
アント「エロスよ、鎧を脱せて呉れ、生涯の事業も終を告げた、今こそはよく死なねばならぬ、マーザアン、疾く立ち去れ、斯る不祥な報知を齎らして、

而も命を全ふするは、其方の幸福ぢや、去れ！」  
エロスをして「の痕のみ残れる鎧を脱らした後、アントニイは、死んだと聞いたクレオパトラが宛然我が傍にあるかのやうに獨白を言ふ。

アント「暫く待つて呉れ、今こそ其方に追付くであらう、クレオパトラ、涙をもて我が容を求めらるであらう。遅れゝば苦痛のみ増す、——我が一生を通して、我が足下を照した炬火も消え失せた、今こそ死ぬるであらう何時まで



暗路を漂泊ふて居らうぞ。總る努力は空しくなつた、爾うぢや、新ゆる力も唯擾亂を招く許りぢや、今は終末を告げさせよ。エロス！——今こそ行かうぞ、我が女王——エロス！女王よ、待つて下されい——。魂が花に憩ふ所で手に手を取つて行きませうぞ。我等の喜ばしい歩行を、幽霊どもが驚きと敬を以つて見つめるであらう、靈界の尊敬を受けて居たエニヤースとチドウ皇后（共にウアシル詩中の人物）の後にも、最早附き随ふて行くものはあるまい、靈界の者どもが、唯、其方と私の周圍に集ふであらう、——これ、エロス、エロス！

先程、錨を脱がせて行つたエロスは、又もや入つて來た。  
エロス、何御用で御座りますか！

アント「クレオパ、ラが死んでから後、俺は神々の蔑みを受ける様な不面目の中に生存へて居る、劍で世界に區劃を立てた俺も、一市を作る程の多人數を

の乗せた大船で、海を蔽ふた俺も、女の持て居る勇氣を缺いでは目ない、又自害した後で、大シーザー殿に見えて、「妾が身を従へたものは、唯だ妾が身一人ぢや」と誇つて居るあのクレオパトラよりも、若し俺が劣つた心を持つて居たとあつては、我れながら面目ない。エロスよ！今は、絶體絶命ぢや、時が追つて來たのぢや。逃れる事も出来ぬ耻辱と恐怖が俺の後に押寄せて來て居るからには、エロスよ、俺は其方に命ずる、俺を殺して呉れ！時が來たのぢや。其方は俺を殺すのではない、實はシーザーの鼻を明すのぢや、さ、元氣よく殺つて呉れ！

エロス「敵でさへも、正面によう狙はぬものを、何うして其のやうな事が出来ませう？」  
アント「エロス、其方は、此のアントニイが、羅馬に引かれて、耻を包み首を垂れ、燃るやうな屈辱を忍びながらシーザーの車の後に曳れて行くのを見物



する氣か」

エロス「何うして其れが見られませう！」

アント「それならば、早く其の劍を抜け、其方が、國家に勳功を樹てたその劍を抜け」

エロス「それ許りはお許し下さりませい」

アント「俺が其方を買ひ取つて奴隸の身分より、自由の身に仕て遣はした時、

其方は此のアントニイに誓ひは仕なかつたが、俺が、其やうな命令をする時に必ずそれを履行すると言つて——さ、刃を抜け！」

エロス「それ程までに仰せならば、その尊ひお顔を、——全世界の尊敬をお受け遣はすことの出来るそのお顔を、何うぞ、そちらへお向け下さりませ」

アント「おゝ、可し」

アントニイは顔を横に向けた、彼れは最後の刃を其の奴隸エロスの手より受け

る心算であつた。

エロス「手前は、劍を抜きました」

アント「抜いた目的を、すぐと逐げて呉れ」

エロス「我が君、我が將軍、我が皇帝、おさらばで御座りまする」

アント「おゝ、よくも申した、さらばぢや！」

エロス「さらば將軍、——此の通りで御座りまする」

彼れは、主君アントニイに刃を當る事が出来ないでいみじくも我れと我が心を刺して斃れたのである。

アント「やゝ、エロス！」

エロス「此の通りで御座ります、——貴下様の、お傷はしい様を見まいと思ふ

て——」

エロスは斃れて了ふ、



アント「お、エロス、其方は引よりも幾十倍といふ士ぢや、其方は俺になすべき事を教へて呉れた、俺のよう仕逐なかつたこと教へて呉れた。あゝ女王とエロスは、共にその勇しい手本を示して、俺に死すべき事を教へて呉れた。なれど俺とても遅れはせぬ、死に急ぐこと、戀人の臥床の急ぐが如くに走るであらう。いざ、エロス、其方の主人は其方の弟子となつて死ぬるであらう、此の通り其方に習ふた(劍の上)に突つ伏す)——や！や！死に損なつたか！死に損なつたか。者共！俺を殺して呉れ！」

此時、アントニイの部下デルセタス、其他の勇士等、聲を聞き付け走り寄り、彼等はシーザーに此の悲報を知せやうと云ふのである。

此の事、何時か女王の耳に入つたかして、女王の宦官ダイオメデスは、女王の命を受けて駆け付ける。それと見たアントニイは、

アント「お、ダイオメデス、其方の劍を抜いて俺に最期の一撃を加へて呉れ」

れ」

ダイオ「陛下、お氣を研かに、女王様は陛下に手前をお遣はしなされました、アントニイは、今の今迄、女王が自害したものと思ひつめて居たのに、其の女王よりの使ひとは受け取れぬ。まこと、彼れに取つて此の事は味天の譴責であつた。

アント「何ぢや、其方は何時女王から使者として来たのぢや」

ダイオ「唯今で御座りまする」

アント「では、女王は未だ息災で居られるのか、して何處に居られるのぢや」

ダイオ「お廟所に閉じ籠つてお在でなされます、——女王様はシーザー殿と和議をお結びなされたと云ふお疑ひを、貴下様からかけられやうと、それ計りを恐れて、貴下様のお怒を緩和げるために、御生害なされたと云ふ報知をお耳に入れたので御座います。——そして、今眞實の事を御傳へせよとて、



手前をお遣はしなされました、なれど一は違ひで手遅れとなりました」  
 アント「うむ、其方の來るのが遅かつた、——こりや、兵士どもを招んで呉れ」  
 ダイオ「方々、將軍のお召で御座りますぞ！」  
 聲に應じて、アントニイの部下三四名は前後して入つて來た。  
 アント「こりや者共、俺を女王の居られる所へ擔いで行け、これが、其方達に命ずる最後の命令ぢや」  
 兵士達は今更の様に悲惨なアントニイの最後に涙を流す、けれどもアントニイは彼等を激勵した。  
 アント「こりや者ども、其方達餘りに悲めば、却つて此の激しい「運命」を喜ばすことゝならうぞ、吾々を罰し居る此運命を歡迎せよ、斯る事を物の數とも思はぬことは、却つて「運命」の裏を掻く計ぢや、さ、さ、早く俺を女王の許に連れて行け」

【 97 】の六

靈廟の中

クレオパトラは、豫て斯る場合にと思ふて、建築して置いた靈廟の中に閉じ籠つて居る、中にはチャミアンとアイラスが、何處何處までもと女王の御を片時も離れぬ。  
 クレオ「チャミアンや、妾は此から一足も外へ出やうとは思はぬ」  
 チャソ「女王、御心配遊ばしますな」  
 クレオ「いゝえ、安心はならぬ、何のやうな恐ろしい事があらうも知れぬ」  
 其處へダイオメデスが馳せて来て下より手をかける。  
 ダイオ「女王様、將軍は御生替遊れました、なれども未だお命は御座りまする」



お靈廟の横を御覽なされませ、兵士どもが、將軍を此方へ、お連れ申して居りまする。」

やがて、アントニイは、兵士どもに擔がれてお廟所の下の所まで來る。

クレオ「あゝ、わが太陽！世界の岸は暗黒になつて了ひまする。あゝアントニイ様、アントニイ様！あゝ助けてお呉れ、チャーミアンや、助けてお呉れ、アイラスや、下に居る人々も力を合せて、アントニイ様を此の塔の上まで上げさして給もいなう」

それを聞いたアントニイは、

アント「女王よ！靜かに！アントニイを滅ぼしたものはシーザーではないぞ、此のアントニイ自身を除いて他にあらうか」

クレオ「ほんに、そのお言葉の通り、アントニイ様に打勝つたものは、アントニイ様より外には御座りませぬ——、なれども、何と云ふ悲しい御最期で御

座いませう」

アント「クレオパトラ、私は死にかけて居る、私は其方の、最後の接吻を受け

るまでは死に度くないのぢや」

クレオ「妾はシーザーの手に捕まへられるのが恐ろしう御座います其處までは

よう降りて参りませぬ、妾は決してシーザーの華かな行列を飾るために羅

馬へは参りませぬ、短劍と毒藥と蛇と、これだけあれば、妾は身の處置を付

けまする——。さ、此處まで在しやいませ、アントニイ様、——さ、手傳つ

てお呉れ、皆のもの——、アントニイ様をお上げ申さねばならぬ、さ、手傳

つてお呉れ」

アント「早く、早く、早く上げねば、私は外んで了ふ」

クレオパトラは侍女達と共に瀕死のアントニイの体を繩で結んで、お廟所の塔

に引上げやうと云ふのである。



クレオ「まあ、貴下の重いこと！妾の重い悲みが、妾の力を奪つて行つてしまいました、少しの重さも、今は堪られぬ程で御座います、強い翼を有つて居られるマキユイの神が、貴下を引上げて、ジヨープの大神のお傍へ貴下をお連れ下さるで御座いさせう、——さ、もう少し、……さ、在しやいませ、在しやいませ、在しやいませ（一屈アントニイをクレオバトラの所まで高く差上げる）……まあ、よく歸つてお在下さいました！貴下は妾の腕に抱かれて御臨終をお逃げなさいまし、——さ、接吻を、接吻によつて新しい命を得られるものならば、唇が破れるとも厭ひはせぬものを——」

アント「私は死にかけて居る！クレオバトラ、さ、葡萄酒を！一語言ひ度いとがある」

クレオ「私も申上げ度いことが御座ります」

アント「唯だ一言いひ度い、女王、其方はシーザーと和睦をなさい、爾うすれ

ば、其方の名譽と一身の安全を計ることが出来やう」

クレオ「一身の名譽と安全を二つながら得ることが出来ませうか、一身の安を求むれば、妾の名譽は汚されます」

アント「まあ、お聞き！、シーザーは頼にならずとも、シーザーの家来プロキユレイヤスは頼みになる」

クレオ「此の上は妾の心と、妾の手に頼る許り、シーザーなどには何で頼りませうぞ」

アント「悲惨な私の最期を嘆いて呉れるな、それよりは、私が世界の、偉大な帝王として世に君臨した半生の榮譽を思ふて満足して呉れ、今私は立派に死ぬのぢや、私の兎を我が同じ國人たるシーザーに譲るのぢや、——羅馬人が打ち勝つた羅馬人に渡すのぢや、あゝもう最期ぢや……力も盡き果てた！」

クレオ「あゝ貴下は到頭お亡れになりましたか、誰れ一人、頼にするものもな



い妾を置いて——。貴下の在しやらない此の世の中、汚れた茅屋のやうな此の世の中に、何うして妾一人活き存へて居られませうか」

アントニイは、終に死んで了つた、クレオパトラの腕に抱かれた儘。

クレオ「お、皆のもの、世界の冠は碎けて了ふた、羽の飾とも、勇士の旅柱とも云ふべき方は倒れて了ふた、今は娘も子供も大人と區別のないものと成つて了ふた、月の照す世界には、非凡なもの、傑出したものは一つも残つては居らぬ……」

女王は爾う言つたなり、思はず其處に氣絶して了ふ。チャーミアンとアイラスは、我れを忘れて走り寄り、

チャー「女王様！」

アイラス「女王様もお亡れなされたのではあるまいか」

チャー「女王様！」

アイテス「女王様！」

侍女共の聲に、女王は再び生氣付いた。

ダレオ「チャーミアンや、妾はもう女王ではない、妾は、賤しい仕事をして活計を立てるあの牛乳搾りの女と何の異りもない、女王の権力は捨てられて了つた、總てが今は空しくなつた。……ねえ、チャーミアンや、「死」と云ふものが、私達の所へ来て哭れるのを待つて居らずと、進んで「死」の家に突進むことは罪であらうか、妾は爾うとは思つて居ないよ。さ、チャーミアンや、何うお仕なの、那樣な顔をして妾を見ないでお哭れ。……もう妾達の燈火は消えて了つたのだ、妾達はアントニイ様の御葬式をした後で、勇ましい羅馬人のやうに、自殺してお後を葬はらうよ……」

一同のものはアントニイの死骸を運び去る。



『五』の七

アレキサンドリヤの前なるシーザーの陣屋。

アントニイが自殺したとも知らぬ將軍シーザーは、其部下の將、アグリッパ、ドラベラ、メツセエナス、ガルス、プロキユレイヤス、其他のものと協議を凝して居る。

シーザー「ドラベラ、其方は彼の所に行つて、降服を勧め、今更躊躇するも無益な業ぢやと申して来い」

ドラベラ「委細、承知いたしました。」(去る)

此時アントニイの家來デルセタス、アントニイが生前に帯びて居た劍を携へて入つて来る。

シーザー「何事ぢや、進んで予に見參を求むる其方は自體何ぢや？」

ラトバオレクとニトナ

デルセ「手前はデルセタスとて、マアク、アントニイ殿に仕へしもの。かの君が起ちて手前に命令を下されし頃は、かの君は手前の御王君、手前はかの君の仇敵とも言ふべきものに刃向はんがために、これ迄命を存らへたものに御座ります、なれど、若し將軍のお氣に召すならば、手前の一身は、アントニイ殿に捧げた如く、亦將軍のもので御座ります、なれど、若し手前が將軍のお氣に召さぬとならば、すぐと一命を御召し下されい」

シーザー「何と言ふ？」

デルセ「おゝ、シーザー將軍、アントニイ殿は御最期をお遂げになりました。」斯ることあらんとは豫て期して居たことであるが、餘りの事に、並居る諸將、今更の様に潸然として、涙を流さぬものはなかつた。殊に、最も哀悼を極めたものは、シーザー將軍であつた。

シーザー「あゝ、アントニイ、私は卿を追撃して此處まで來たなれど、これも



羅馬人の根根を絶たんが爲めに外ならぬ。私が卿に、我が落日の悲運を示すか、さなくば、卿が非難な末路を見ねばならぬ、何れか一人は倒れる運命を持つて居るのぢや。卿と我の兩個は、此の世に立出来ぬ地位に置れたのぢや。——されどアントニイ、私は血涙を揮つて卿の最期を泣く、あゝ我が義勇よ、我が親友よ、我が戦友よ、我が戦友よ、我等兩個を和解し難い境地に置いて互に引離した運命こそ、無情の極みである！

シーザーは、心よりアントニイの死を慟哭した、吁、一世の英雄は、英雄の涙に依つて弔はれたのである。

此の時、シーザー將軍のもとへ、クレオパトラの使者が来て、此の上は、萬事將軍の命を俟つと言ふ口上を残して歸る。

【五】の 11

廟所の中

内心に於てはシーザーは。クレオパトラを凱旋の土産として羅馬へ連れて行き度い考へである、彼は何うかして、羅馬へ行くことを納得させやうと思つて、自分の家來プロキユレエヤスをクレオパトラの所へ遣はす。

プロキユレエヤスは廟所やの窓に梯子をかけさして一人の兵士を中へ入れ、除るに門を開かしめ自から中に入り、シーザーの挨拶を述べて、暗に女王の氣を引いて見る、

すると女王は、羅馬行には斷じて應じ難い意志を述る。

クレオ「妾は食事を取らねば、飲物も飲ぬ、無駄口も聞きませぬ、眼も仕ませぬ、妾はシ、ザ 殿の御殿へ連れ行かれて手枷をはめられるやうなことは仕ませぬ、オクダグキア様に、嘲り笑はれるやうなことは仕ませぬ、賤い羅馬人の、誓り懸ぐ八々の前に立つて、觀せ物、曝しものにはなりませぬ、



それよりは、此の埃及の溝の中で死んだ方が、何の位良いか知れぬ、ナイル河の泥の上に、眞ッ裸になつて、死骸を曝し、蠅の餌食になつても苦しう思はぬ、金字塔の上に縛り上られて、鎖に繋がれても厭いは仕ませぬ！」  
女王の決心が此の様に固いので、シーザーの使者も如何ともする事が出来ず引上げて了ふ。  
後でクレオパトラはシーザーの番兵に、シーザーの本心を聞いて、死ぬとも羅馬へは行くまいと決心の臍を固める。

シーザーはクレオパトラが自害することを恐れて、今度は、自から廟所の中に女王を訪ふ。

シーザー「女王は何れに在する？」

傍に居た番兵の長ドラベラは、クレオパトラに向ひ、

ドラベ「女王様、これが陛下で御座りまする」

それと聞いてクレオパトラは、シーザーの足下に跪づく。

シーザー「起たれよ、女王、跪づかれな、何うぞ起たれよ、女王」

クレオ「陛下、御前に身を投伏せまする、何事も御主君として仰せを畏まねば

なりませぬ」

シーザー「悪意あるものと思はれるな、此度のことは、胸に刻んで忘れねど、行

きがムリより出来たことと思ひますぞ」

クレオ「世界の王よ、妾として、此方に罪なしと、何うして辯疏が出来ませうぞ、

妾として、世の女が、恥かしと思ふた弱點を有つて居りましたに」

シーザー「女王よ、若し貴女が、吾等の思ひ通りにせらるゝならば、總て寛大に

を取扱いたしませう、なれども、若し萬一我意を振る舞ふて、アントニイ

と同じことなされるならば貴女の御子達は無事では置かれませぬぞ」



子を思ふの情に何人か異があらうか、クレオパトラも斯程までに言はれでは、表面許りでもシーザの意に従はずには居られぬ、女王は、終にシーザの言葉通りにすると、いしくもその場は答へたのである。

【五】の三

クレオパトラの死

シーザの去つた後で、ドラベラは女王に向ひ、  
ドラベ「女王様、ノーザ陛下は、シリヤを通つて羅馬へ凱旋をなされやう御所存で御座りまする、そして三日の内に、貴女様と、御子様達が羅馬へ御先着遊ばすやうに、御準備をなされませ」  
ドラベラは爾う云ひ置いてお廟所を出て行つた。

クレオパトラは侍女のアイラスに向かひ、  
クレオ「なる、アイラスや、其方は何うお思ひだへ、其方も妾も埃及人形になつて羅馬の見世物にされやうか、賤しい見世物師どもに擔れて曝し物にされながら臭い呼吸を嗅うか、」

アイラ「まあ、恐ろしい！」  
クレオ「それ所か賤い役人どもが、妾達を娼婦かなんぞのやうに捕まへるであらう、歌賣が、妾達の事を歌にして賣るであらう、道化役が妾達のことを芝居に仕組み、酔つ拂ひのアントニーが出たり、キイ／＼聲の子供が、クレオパトラの役をしたりするであらう」

アイラ「あゝ何ういたしませう」  
クレオ「慙うあるからには、シーザの鼻を明してやるのが、せめてもの心遣ぢや——これ、チャーミアンや、妾を女王の様に氣飾らしてお呉れ、御座船に



乗つてアントニイ様のお目にかゝりに行つたのやうな氣持にさしてお呉れ  
—さ、妾の冠と、服を持つて来てお呉れ

アイラスがお次の室へ行く苦もなく、一人の番兵が入つて来て、今しも御門前  
に一人の百姓が、女王様に、無花果を捧げ度いと言つて、入つて来て居りま  
すと告げる、女王は苦しうないから、此方へ入れて給れと命ずる。

百姓の持つて来た無花果の籠の底には、アスブと云ふ毒蛇が入れてあつた、ク  
レオバトラは、豫々夫を持參するやう、百姓の一人に命じて置いたのである。  
アスブに肉を噛せれば、苦痛もなく死なれるのみか、其面影も生前の美はしさ  
を少しも損はぬと云ふので、さてこそクレオバトラは、最後の準備に此の毒虫  
を取り寄せたのである。

やがて、アイラスは女王の御服と、冠を持つて來た。  
クレオ「おゝアイラスや、女王の着物を奪せて、冠を知らせてお呉れ、——あ

埃及の葡萄の液が、妾の唇を濡すことはもうあるまい、さ、アイラス  
や、早く——。妾はアントニイ様が、妾を呼んで在しやるやうに思はれてな  
らぬ、あのお方は、妾の健氣な行ひを讚やうとして体をお起しになつた、あ  
の方はシーザーの勝ち誇つた様子に嘲笑つて在つしやるやうだ、我が良人アン  
トニイ様、今こそは、妾の健氣さが貴下の妻と呼ばれる資格となりませう、  
——アイラスや、チャームミアンや、さ、最後の接吻を受けてお呉れ、さらば

ぢやー!

女王は二人に接吻した、その時アイラスは、豫て準備して置いたものか、毒藥  
を仰ひて、女王の足下にバタリと仆れて了つたのである。

クレオ「おゝ、アイラスは先へ行つたか、アントニイ様へ、先にお目にかゝつ  
たら、すぐと參りまると申してお呉れ」  
やがて女王は毒蛇を籠の中より取り出して、玉のやうな自分の胸を噛ます。



クレオ「其方の其の鋭い齒で、妾の玉の緒を噛み切つてお突れ、  
それを見て居るチャーミアンは、身も世もあらぬ思ひ、  
チャー「アン、あゝ、東の星！」

クレオ「静かにお仕、チャーミアン、私の子供が乳を吸て居るのが、見えぬか  
へ！」

チャー「おゝ、胸が裂るやうで仕座います」

クレオ「香膏のやうに氣持が良い、春風のやうに柔かな氣持がする、アントニ  
イ様、すぐと参ります、何うして一人残つて居られませう——」

女王は他一つのアスプを腕にあて、眠るがやうに靜かに死んで了つた。

チャーミアンも、遅れを取らじと急つて居る所へ、シーザの番兵が慌てゝ入  
つて來た。

番兵「女王は何處に在す。」

チャー「女王様をお起し申さぬやうに、そつとお話し—  
番兵「シーザ様からのお使ひぢや——」

チャー「遅いお使ひぢや」

言ひつゝチャーミアンもアスプに腕を噛せる。

チャー「此の女王様は、歴代の王様方のお胤ぢやに！愚かな奴め！」

注進に依つてシーザが驅けつけた頃は、美しい玉の緒は絶え果てた後であ  
つた。

斯くの如くして埃及の明星は地に墜ちたのである。あゝ英雄と美人と逝いて二  
千年、されど、其戀の物語は沙翁の筆に依つて、今も尙、昨日の如き心地がす  
る。



ラトバオレタゴニトシア

アントニイと  
クレオパトラ(終)

大正十二年七月廿七日印刷  
大正十二年八月六日發行

【定價金四十錢】

泰西傑作叢書會

代表者 大川 錠吉

東京市淺草區三好町七番地

大川 錠吉

東京市淺草區南元町廿四番地

小宮 定吉

同所

集榮館第二印刷部

東京市淺草區三好町七番地

集榮館

電話淺草二五三番、振替東京四〇九番

不許複製

發行者

印刷者

印刷所

發行所



西泰

傑作叢書

三色版口盡入  
菊半形頗美裝  
六號活字印同鮮明  
紙數二百七十頁余

★ ★ ★ ★ ★

セーキス ビーヤ原作	(1) ヴエニスの商人 <small>(人肉の 抵當)</small>	定價金四十 送料金四十
メリケル リソク原作	(2) タンタヂールの死	定價金四十 送料金四十
セーキス ビーヤ原作	(3) オセロ	定價金四十 送料金四十
トルストイ 原作	(4) 復活 <small>(カチユ シヤ)</small>	定價金四十 送料金四十
ホウマン タール原作	(5) エレクトラ姫 <small>(女ハム レット)</small>	定價金四十 送料金四十
アンドレ エフ原作	(6) 星の世界に	定價金四十 送料金四十
ベルシヤ 大文學	(7) 一千一夜物語 <small>(アラビヤ ナイト)</small>	定價金五十 送料金四十

291  
550



終

